

## 函館の教育のあり方検討協議会（第5回）会議録

|     |   |
|-----|---|
| 日 時 | 平成29年2月20日（月）18：00～20：08  |
| 場 所 | 函館市役所本庁舎8階第2会議室   |
| 出 席 | <p>委 員 田 中 邦 明（北海道教育大学函館校教授）<br/>         齊 藤 縁（北海道教育大学附属函館幼稚園副園長）<br/>         山 田 幸 俊（函館市小学校長会事務局長）<br/>         毛 利 繁 和（函館市中学校長会事務局長）<br/>         中 島 悟（北海道高等学校長協会道南支部長）<br/>         中 村 和 代（函館市P T A連合会事務局長）<br/>         絹 野 重 治（函館市社会教育委員）<br/>         竹 内 正 幸（函館商工会議所事務局長）<br/>         井 上 実 香（公募）</p> <p>事務局 木 村 雅 彦（学校教育部長）<br/>         鶴 喰 誠（生涯学習部次長）<br/>         加 賀 重 仁（学校教育部学校教育課長）<br/>         柴 田 成（学校教育部学校再編・計画担当課長）<br/>         寺 本 公 彦（学校教育部教育指導課長）<br/>         佐 藤 大 輔（学校教育部教育指導課指導主事）<br/>         小 松 将 人（学校教育部教育指導課指導主事）<br/>         村 上 貴 洋（学校教育部学校教育課主査）<br/>         松 本 大（学校教育部学校教育課主事）</p> |
| 欠 席 | 委 員 大 場 みち子（公立ほこだて未来大学教授）   |
| 傍 聴 | 3名  |

## 1 開 会

出席者9名。過半数を超えているため、会議成立。

## 2 議 事

### (1) 函館市教育振興基本計画の基本的方向性について

(田中会長)

みなさんこんばんは。本日6時からということで、だいたい2時間ほど、8時頃を目途に終了させていただきたいと思うので、どうぞ、ご協力をお願いしたい。

それでは、早速だが、本日の議題1「函館市教育振興基本計画の基本的方向性について」を進めたいと思う。

前回、3グループに分かれ、函館の教育が目指す人間像、これについて突っ込んだ議論をした。その結果を踏まえ、人間像を事務局に整理していただいたので、本日は、大きく2つ、協議事項として提案させていただきたい。

まず、1点目は、修正していただいた人間像について確認をお願いする。

2点目は、この確認した人間像を実現するために施策を進めていかなければならないので、その方向性、方法論、4月以降に協議する各論の方向性とも言うことができるかもしれないが、そのような基本的な方向性について協議を行う。

本日は、この2点が協議事項となる。

では、まず、事務局から資料の提出があった。資料1から資料3までが協議事項の1点目の人間像に関わると思うので、一括してご説明をお願いしたい。

≪事務局より、資料1、資料2、資料3に基づき説明≫

(田中会長)

ただいま事務局から資料の説明があった。資料1は1枚ものであるが、計画の構成にかかる大枠が示されている。今回協議する人間像と基本的方向性は、第3章に書かれるということだ。それから、資料2が前回の協議を受けて、修正されたものであり、そのような形でまとめていただいた。A、B、C、それぞれの協議のグループ別に記載されてある。それが枠の中で記載されている。それから資料3だが、協議を受けて文章としてお示しいただいた原案ということだ。

さて、本日の1点目の協議事項だが、函館の教育が目指す人間像、特に、資料2の修正について。まず、枠組み、このようなものでよろしいのかどうか。「自立」「共生」「創

造」とまとめられたし、A、B、Cの各グループが「新たな魅力を作り出す人」など、何々する人、という形で記載された。まず、資料2の枠組みがこれでよろしいかどうか。さらに、資料3にも同じ枠組みがある。このようにきれいに整理されたものだ。これらの点になるかと思う。

まず、文章上の問題もあろうかと思うので、皆さんからご意見を頂戴したいと思う。何かお気づきの点はあるか。齊藤委員、いかかだろうか。

(齊藤委員)

前回の協議を受けて、「自立」「共生」「創造」とまとめてもらい、気持ちがスッキリしたところだが、資料2の修正にあたっての考え方のところ、「自立」「共生」「創造」とした。その柱に合わせ」という文言が使われている。一方、資料3になると「自立」「共生」「創造」の3つを基軸とした」という言葉がある。国が「基軸」という言葉を使っていて、函館市は「柱」という言葉を使うのかどうかということだ。

前回の会議の最後の方でお話があったと思うが、「自立」というものがコアにあって、「共生」というものがそのアラウンドにあって、そして「創造」というものは、その周りに絡まっていく、円錐形にスパイラルになっていくというイメージだったが、「柱」というイメージで言うと、まっすぐ通っているイメージがあるので、そうすると、この辺の3つの言葉の図式化をする場合に「柱」とするのか、または「基軸」、「主軸」という言葉にするのか、という点を確認させていただきたい。

(田中会長)

これは概念的な問題だと思う。どちらがよろしいかは議論が必要だ。その他いかがだろうか。

ところで、資料に誤字がある。資料2の3ページに「共生」の表があるが、語句と考え方が記載されていて、「共に支え合う人」の説明で「協働することを通じて、自らが支えられている」とあるが、これは「支えられている」ということだ。資料の修正をお願いしたいと思う。次に、山田委員、どうぞ。

(山田委員)

資料3は、それぞれ語尾が「自立した人」「共生する人」「想像する人」とまとめられているが、「自立」だけが、「した人」となっている。そのあたりをそろえるということはないのだろうか。「自立する人を育成する」などのように。そろえていないのは、何か意図がおありなのだろうかというところが気になった。

(田中会長)

はい。わかりました。

中島委員いかがだろうか。ございませんか。では、中村委員、いかがだろうか。

(中村委員)

少し気になったのが、資料3の1ページの一番下の囲みの「自立」の部分で、「自主的に学び」という部分の「自主的」という言葉が、説明を読むと意味が理解でき、そういうふうになってくれば良いなという思いはありながらも、少々強制的な感じに聞こえる。そうできないから、そのようになって欲しいと思うのかもしれないが、「自主的」という言葉を、「自ら」という言葉に置き換えると、受ける印象が違うなと思った。

(田中会長)

わかりました。では、井上委員、いかがだろうか。

(井上委員)

私は前回お休みしてしまったので、資料をじっくり読んで考えていたが、「目指す人間像」というのは、子どもを持つ親としても、こうなってくれたら良いと思うのだが、それを実際、函館市はどのように進めていくのかと思っていた。

こういう素晴らしい考えを軸として、もちろん作られるべきものだが、それを実際どのように実現していくのかというのが気になったところだ。

(田中会長)

つまり、今日の論点2番目に関わることとなると思う。では、絹野委員、いかがだろうか。

(絹野委員)

非常に分かりやすくまとめていただいたと感じる。

資料2の2ページ目の「自立」の考え方のところだが、「自主的な学びのスタイルを構築」とあるが、学びのスタイルというのは学び方だと思うが、次期学習指導要領の中で、今までアクティブ・ラーニングと盛んに言っていたことが、その言葉を使わないということになり、「主体的・対話的で深い学び」という言い方をするようになった。もし、学び方を問題にするなら、この考え方のところを「自主的・対話的な学びのスタイルを構築」としてもよいのかなと感じて読ませていただいた。

もう1つ、資料3で、函館は働く世代の人口減少が非常に目立つとある。函館で活躍す

る人がいなくなるんじゃないかという心配をしていたが、函館で育った子どもたちが世界の中でも活躍するという、広い観点で教育をしていくという考え方を強調していただいたことは非常に良かったし、また、ふるさとに戻ってきて函館のまちを活性化する、そういう動きをしてもらえれば良いのかなということで、このところは非常によくまとめていただいたと感じている。

(田中会長)

では、竹内委員、いかがだろうか。

(竹内委員)

資料2については、前回の議論を非常によくまとめていただいたので、修正するところは何もないと思った。

意見ではなく一応の確認だが、資料3の書きぶりは「目指すこととします」「考えます」「掲げます」となっており、誰が誰に向けている人間像なのだろうかと思った。市が市民に向けて送っているメッセージという意味合いなのだろうか。そこを確認したい。

私が是非入れて欲しいと言った部分、一番下段に「郷土に対する誇りや愛を強く持つことが大切です」と書かれているが、市が市民に向けて作っているものだとすると「大切です」という言葉だけ、多少強めの表現であるように感じる。入れて欲しい文言ではあるので、この部分は残して欲しいが、「大切です」という書きぶりになるのか、というところだけは気になった。

(田中会長)

なるほどわかりました。これは、基本計画の根本的な考え方に関わるところだ。函館市が市民に対して「こういうものになってもらいたい」という願いを一方的に書くものではなくて、市民と共に作り上げていくという。「共生」という意味合いは、そこにもあると思う。そういう意味で、すべてのこの文章が整合的であるかどうか。主体は何か。どういうメッセージなのかということだ。非常に重要な指摘だったと思う。それでは、毛利副会長、いかがだろうか。もう解決の糸口が見えているところもあるが。

(毛利副会長)

私の意見というよりは、今、話を聞いていて何点か思ったことをお話したい。

最後の竹内委員から出た意見だが、まず、大きな目標を設定するということが大事だと思う。それは、私たち委員に半ば任されているようなところがあって、非常に重いと思っているのだが。目標に対して、ここでは方策という言葉を使っているが、もう少し細かに

降りた目的に対して目標があると思う。竹内委員がおっしゃるように、本当はみんなで作り上げていくべきところかもしれないが、ある程度のスタンスは、私たちに委ねられたと思っているので、目的や方策を考えると、具体的に方策を行うことでどんな姿に近づくのかというところあたりは、一度示さなければならないと思っている。来年には形としてまとめなければならないので、一回作った上で、もしかしたら竹内委員がおっしゃったように、みんなでもう一度検討して、壊してまた作り直すということも出てくるかと思うが、私たちの今の使命は、一回そのようなスタンスを作った方が良いのではないかと、それに対して議論できれば良い、というのが私の意見だ。主体は何かといえば、市民一人ひとりだ。これは、最終的に生涯学習の観点で作るということだ。一人の人間が生まれてから生涯を見渡すところまでの教育の姿ということだと私は思っている。全体の形としては市民目線で、誰が見ても分かるというのは大事なことなので、そういう意味ではスタイルとしては非常に分かりやすく、よくまとめていただいたと思う。

それから、中村委員がおっしゃった「自主的に」という言葉には、私も引っかかっている。とても難しい言葉だと思う。捉え方がまちまちになるので、ここをもっと良い方に変えることができないかと思っている。

絹野委員がおっしゃったように「主体的・対話的で深い学び」というのは、次期学習指導要領で触れられているが、函館市民が生涯の学習の中で、そういうふうと考えていけるような学習のスタイルを考えていけるようになったら良いと思う。それを表すのに、「自主的」という言葉が果たして適切かどうか私も分からない。分からないという言葉は良くないかもしれないが、自分の頭の中には、しっかりした言葉が見つからない。でも、一人ひとりの市民が生涯に渡って、単に自分で学習するというよりも、仲間を集めながら成長し、学んでいく姿というのを何かこう、表せたら良いと思う。

斎藤委員がおっしゃった「基軸」と「柱」。これは、どうするか。ある程度、方向性をつけた方が、この後の作業としては良いのかなと思う。

(田中会長)

これは、ここで決めない方が良いかもしれない。

(毛利副会長)

そう思う。文言の問題だ。

(田中会長)

最終的に必然的に決まっていくような気がする。

(毛利副会長)

そう思う。以上が、今までお話いただいたことを聞いて思ったことだ。

(田中会長)

毛利副会長が全部まとめてくださったように思う。

重い、軽いの問題が結構あり、大きい問題と小さい問題を区別していかなければならないが、「自主的」という言葉に引っかかりがあるのは、皆さん共通しているところだ。何故引っかかるのかと考えると、自助努力によって自分で学ぶ、ということではないからだろうと思う。今、学ぶ機会を奪われている子どもたちがたくさんいる。以前の協議会の議論にもあったように、よくこの環境で学校に通うことができているなど思うような子どもたちが少なからずいるこの函館の中で、「自主的」というのは棘のある言葉になりつつあると思う。

「対話的」ということの意味はすごく良いと思っている。何故、「対話的」という言葉が良いかということ、教員が学生に指導して教える「教授」という言葉があるが、学生の方は教授ではなく「学習」なのだ。「自ら学ぶという観点」から「大学は学習の場である」という言い方をすると、学習は静的なもの、お互いに一方通行的なものではなく、対話的で双方向的なものだ。お互いに学び合うと言った方が良いかもしれない。教える方も教えることを通じて学ぶということがある。そういう双方向的に学ぶということがしっくりくるような気がする。共に学び合うような、共に高め合うような学びのスタイルという、そういう言葉。

(毛利副会長)

それで齋藤委員のおっしゃった「スパイラル」というところと絡んでくる。共生のところと。

(田中会長)

この3つは関係している。「自立」「共生」「創造」というのは、バラバラになっているのではなく、共生しなければならないので、お互いに学び合うということになるし、創造的なものというのは、そういうやり方でしか生まれてこない。最も良い創造のプロセスというのは、お互いに学び合いながらお互いに助け合っていくということなんだと思う。それをいかに表現するか。そこは今日の我々の課題の核心部分だろう。

(絹野委員)

それと、もう1点ちょっとよろしいか。

資料2の2ページの、先ほど私が話をした考え方のところだが、「知識を深めるために」と考えるのは少し狭まりすぎではないかと。これは「自主的・対話的な学びのスタイルを構築し、生涯を通じて学び続け」で良いのではないか。技能もある、必ずしも知識ばかり、知識に限定してしまうと狭い観点の学習とならざるを得ないのではないかと思う。だから、この「知識を深めるために」にグッと引っかかるなという感じがした。ここを読むと。

(田中会長)

まず、技能は入るだろう。それから、学び方に深く関わるものとしては態度の問題もある。モチベーションというものがある。

(絹野委員)

問題解決能力もあるし、「知識を深め」と限定されてしまうと範囲が狭まるかなと思う。

(田中会長)

学び方というのでも学びの中に入ってくる。

(絹野委員)

そう思う。

(毛利副会長)

深くなってきた。

(田中会長)

自主的な学びというところが残ったとしても、それを補完する説明が必要だ。我々が自主的と考えているものはこういうものであると。

(毛利副会長)

自主的という言葉を残したとすれば。

(田中会長)

私は残っても良いかなと思うが、説明が必要であると思う。中村委員の感覚は鋭いなと思った。今の学びのスタイルということを説明するうえで、「知識」以下のところ、ここ



は非常に思案のしどころだと思う。いかがだろうか。絹野委員からは技能もあるだろうと。私が申し上げたように、態度や学び方というものもあるだろう。そういったものが付け加えられていくとよいのかもしれない。齊藤委員，どうぞ。

(齊藤委員)

先ほど、絹野委員がおっしゃっていたことは私も考えていて、例えば、幼児教育となった場合については、「見方・考え方」というものが次期学習指導要領では入ってくる。その「見方・考え方」，そして「主体的・対話的」で最終的に「深い学び」というような形になるのかなど。そこのところに、先ほど「柱」にするのか、「基軸」，「主軸」とするのかというところで、「自立」と「共生」は同じフィールドのところであり、そして、それらが深まっていく。次期学習指導要領の中、それぞれのどこまでに巣立つ、巣立って欲しい姿というのが明確になって、意識していく中で、一応この横ライン的なところに巣立って欲しい姿というのが今度具体的に示されてくるだろうと。そこのところに主体的・対話的な学びがあって、そこを繋いでいくところに「創造」というところが絡まってきて、先ほど毛利副会長もおっしゃったように、具体的な方策をやはりイメージしながら、この大きなところの流れを確認していくという作業をしていくということも大事だと思った。「主体的な」とか「自主的な」という言葉でいうと、これもやはり、もともと幼児の言葉で言うと「没頭する」，何かの事象に没頭する、そして「創出する」，自分を表現して創出していく、そして振り返ってというところで、遊びから学びの基盤ができてくるところから言うと、これが一直線に主体的から対話的になるとかではなく、学びが循環していくというか、時には違う展開もしたりというような、入り組んでいく様子というものがイメージして現れていると、その生涯というところもつながっていくのかなと思った。

(田中会長)

幼児教育から見ると、「見方・考え方」ということがベースになると。

(齊藤委員)

次期学習指導要領では「見方・考え方」で考えられている。小学校との接続ということと、そこまでに育てたい姿を意識したときに「見方・考え方」で捉えられると考えられている。

(田中会長)

わかりました。ちょっと豊かになったが、まとめるのはちょっと。どういう文章にしたら良いか。

(毛利副会長)

今までの話で整理しなければいけないと思うのは、概して皆さん、資料1の図が見やすいとか、形としてまとめていただいたというイメージだろう。だが、齊藤委員からは、やっぱりこれは絡み合っているだろうということで、表として整理するとどうしても絡み合いの様子が見えづらくなる。

典型的な例かどうか、分かりやすいかどうか分からないが、絹野委員から出た「アクティブ・ラーニング」の話で、最初に出た時は「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」について、それぞれどういうものか分類した形で出ていたものが、最終的に、今、答申で出てきたように、それらはバラバラのものではないということで「主体的・対話的で深い学び」と一つの言葉になった。しかし、それぞれの意味が何かは、表形式の方が分かりやすい人も多いわけだ。

齊藤委員から専門的な話も出たが、市民目線で見ると分かりやすいというのは、まず1つの大事な要素だと思う。だから、それが絡み合った様子というのが、また別に当然含みとしてあって良いのだが、どちらが市民目線で見やすいのかという方向で整理するのが大事だと思う。考えとしては、当然これらが絡み合っている。あるいは「自立」、「共生」というものがある、そこに「創造」が打ち立てられるとか。いろいろなイメージ図が考えられるわけだが、何よりもパッと見て「ああそういうことか」と理解できること、そこを大事にした方が良く思うと、結局は、最初のこの表に戻っていく気がする。

田中会長がおっしゃったように、その含み、「自主的というのはこういう意味なんだよ」という含みを、どれだけ広く深くできるかというのが大事だと思う。

(田中会長)

この資料だと、1本ずつ柱になっているので「柱」という表現がふさわしいように思える。これは1つの側面というか、切り口を見るとこう見えると。見え方だと思う。それが正しく理解してもらえるかということには工夫が必要かもしれない。立体モデルのような。立ち上がっているような。そういう、各頂点がそれぞれ「自立」だったり、「共生」だったり、「創造」であるような立体モデルが必要かもしれない。困った。それにしても説明が必要だ。今、資料2の2ページの「自立」に集中してきた。この学びのところ、一番上の「自主的に学び」から「個性や能力を伸ばす」までのところ。ちょっとここは頭を冷やしたほうがよいか。

(毛利副会長)

齊藤委員がおっしゃったように、次期学習指導要領における学習評価が「知識・技

能」，「見方・考え方」，「学びに向かう力」という，この3つに大きく観点が示されてきているわけで，そう考えると，この内容ではなくてという気がする。

(田中会長)

要素が，キーワードが出てきた。ここは，すぐ文章にするのは難しいので，後で少々，タイムブレイクを設けたいと思う。よろしいだろうか。

それから，今，議論している以外のところで，今，言った問題と同じようなことがないかどうか。一通り，「共生」や「創造」についてもそういう論点がないかどうかを確認していきたいと思う。いかがだろうか。

(齊藤委員)

論点ということではないが，資料3で気になるところが「活躍」という言葉だ。「函館で活躍する」「全国・世界を舞台に活躍」「将来的に函館のために活躍する」というのは，リーダー的に活躍をするというイメージで使われるのが一般的ではないかと思う。最近の新聞で「社会で活躍する」「一億総活躍社会」の「活躍」とはどういう意味かという記事が出ていたが，社会に出て働く女性は活躍しているが，家庭で子どもを一生懸命育てている人は活躍していないのかだとか，税金をたくさん払っている人は活躍しているけれど，税金を払っていない人は活躍していないのかだとか，「活躍」という言葉の意味合いが結構広く捉えられるところだと思う。この部分を読んで函館らしいと思ったが，「活躍」という言葉の使い方，どういうイメージで活躍をするのかなど。きれいに言うと「総活躍」だから，どの人も活躍と言えるが，実質的な経済状況のことを考えると，やはり，例えば女性が働きやすい環境のようなものが具体的な方策として出てくると思っているので，皆さんが持っている「活躍」のイメージの中に，このような側面があると良いなと思う。

(田中会長)

「活躍」という言葉は資料3にはあるが，資料2には出てない。だから，やはり飛躍があるのだと思う。いわゆる高齢化社会であるから，お仕事を持っておられない方も人口の3分の1とかになる社会だ。それから，子どもたちも，まだこれから学習して社会に出ていくという卵みみたいな状況だ。そういう方々も含めて「活躍」という言葉が適切なのだろうか。これはちょっと議論の余地があるところだと思う。これは重要な指摘だと思う。それでは，少々お時間をいただいてクールダウンして，今の論点として，資料2の2ページの「自主的」というところ。この説明文としてふさわしい文章がないのだろうか。知識だけじゃなくて「見方・考え方」「技能」「態度・学び方」といったキーワードがたくさん

出てきたので、生涯学習にふさわしいアプローチが必要になるかもしれない。

それからもう1つ、資料3の第4パラグラフ、「創造」にあたるところで、「活躍」という表現を、何か適切な言葉に置き換えることができないか。

15分ぐらいお時間をいただいてよろしいか。休憩も含めて19時5分まで。その後、皆さんからお一人ずつご意見を頂戴するようになると思うので、よろしくお願ひしたい。それでは休憩に入りたいと思う。

#### 《検討時間兼休憩15分》

(田中会長)

では、一番シンプルなところから進めるとして。齊藤委員が「活躍」という問題について違和感があると。だから、これに変わる言葉を探るか、あるいは、こういうことを言うのをやめるかのどっちかだが。

(齊藤委員)

同じ「活躍」という言葉を狭いところに3つ使われていたので、例えば、1つは「活躍」で、1つは「いきいきと」だったり、1つは「生きがいを持って」とか、何か、そういうものだと違和感を覚えなかったと思う。揃いも揃って3つ「活躍」だったので、私は違和感を覚えた。

(田中会長)

その次にある「郷土に対する誇りや愛を強く持つこと」、これが本当のゴールで、本質的な問題であって、それを表現するために、このような文章が出てきたと思う。

自分は今、活躍しているとは言えないけれど、誰にも負けない誇りや愛を持っている。そういう人を育てるとのことだと思う。いかがだろうか。これが本当のゴール。

「郷土に対する誇りや愛を強く持つこと」。このイメージを豊かにすることだと思う。絹野委員、何か良い考えは。

(絹野委員)

私はあまり気にならない。今、会長がおっしゃったような形でまとめていただければ、「活躍」というのは、今、この文章で十分理解できるのではないか。多くの人にも理解されるんじゃないかと思う。

(田中会長)

こちらの方が表面的なものと本質的な問題、2つ対比されている。「活躍」という言葉が独り歩きしないように、という警鐘なんだろうと思う。毛利副会長、いかがだろうか。

(毛利副会長)

ここは「創造する人」につながるのか。

(田中会長)

つながると思う。

(毛利副会長)

創造する人を目指して書いている文章。何かを創ったり。

中村委員か、井上委員が話したそうにしているが。

(中村委員)

「全国・世界を舞台に活躍」という言葉を一般市民として読むと、何かしらの結果を出しているということが求められていると捉えてしまうので、「活躍」ではなく、日本人として、函館を故郷に持つ人間として生きているだけで、そこで生活を営んでいるだけで十分なのかと思うと、「活躍」ではなくて「生活している」などの身近な言葉に置き換えると、スッと入ってくるのかなという気がする。

きっと、井上委員の方がもっと良い案を持っていると思うので。

(井上委員)

私はあまり難しい言葉はわからないが、「活躍」と言われてしまうと、テレビに出ている人だったり、新聞に載っている人だったりするので、ごく普通に生活している主婦にとっては、「活躍」といわれても「私は何もしていない」と感じて落ち込む気持ちになると思うし、「このままずっとこの生活が続いていくんだ」と思うと、それこそ先ほど出ていた自主的に学ぼうとか、個性とか、そういうことも考えながらも、目の前のことで手一杯になってしまうと思う。今、やっていることが素晴らしいんだと気づくことも、すごく大事だと思うし、一人ひとりが日々の、目の前のことを頑張っていることで国を作っているんだということに気づくと、毎日が楽しくなる。「活躍」と言われると、ちょっと。

(田中会長)

中村委員のおっしゃった「生きていること」、私の父が認知症だが、生きているだけで、私が行っても分からないぐらい。そういう人でも、ちゃんと函館で生き続けられる。

生き続けられるということはあるがたいことだ。私もひょっとしたら将来そうなるかもしれないが、生き続けるということは、生きることそのものだ。それ以外はない。そこに郷土に対する誇りや愛を持ちながら生きるということだ。竹内委員、いかがだろうか。

(竹内委員)

何かの目的意識を持って生きているというだけでよいという気がして、その言葉を探していたが、なかなか出てこない。「活躍」までしなくても、何かの目的を持っているだとか、そういったところで良いという気がするが、言葉が出てこない。教育が目指す人間像なので、教育の先にある言葉でなければ、やはり成り立たないのかなという気が若干したが。

(毛利副会長)

枠内の3行目、創造の説明文の方がしっくりくる。その1文で。それを一生懸命こういうことですよと書いた段落が、もしかしたら、ちょっと違うのかもしれない。この部分も、もちろん含んでいるんだけど、ということをおしやっただが、この部分を全否定しているわけではないですよ。

(事務局)

おそらく「活躍」「活躍」「活躍」と3つ並んでいるので、何となくイメージが強いということだと思う。「函館を愛して、函館の土地でしっかり生き抜いていく」というのが、1つ目の意味で、2つ目は「函館を離れて、その中には全国・世界で活躍する。そういう人がいてほしい」という意味。そういう人も必要だと思う。でも、離れたけれど、思いは常に函館に寄せてもらいたい。それがやがて函館のためになる、こういうことだと思う。だから「全国・世界を舞台に活躍」、この「活躍」は生かして良いと思う。

(毛利副会長)

これを潰すんじゃなくて何か含みとして。

(事務局)

「将来的に函館のために活躍する」という最後の「活躍」については言葉として、思いを常に寄せている、そういう人のイメージ。1つ目はその土地でしっかり根を下ろして頑張っている人で。そういうイメージが皆さんと共有できるのであれば、それを事務局で言葉に直したいと思う。

(田中会長)

文章に3つある。「活躍」が。

(事務局)

そもそも、これは「たたき台」であり、今日は、委員の皆様方のイメージがだんだん寄って行くような言葉、キーワードが何個か出てくれば良いと思う。それを確認しながら、事務局の方で文言を作っていければと考えている。

(田中会長)

竹内委員の「目的を持って生きる」というのは私も共感できて、生きがいを持つということ。生きがいのある生き方をしていくという。その中に世界で活躍する人も入るだろうし、函館で何か大きな貢献、社会や地域に寄与することを目標として生きるということもできるわけだ。そういう生きがいという問題も入るのかなど。障がいを持っておられる方でもそれは可能だと思う。子どもでも可能だと思う。この部分は、今、この場では、いじれない。

(毛利副会長)

結構キーワードは出たと思う。事務局には、もうひと踏ん張りお願いしたい。

(田中会長)

事務局は、ここまでやってくれたので、宿題は少々大変かもしれないが、次回までにご提案をお願いしたいと思う。

今、「活躍」の問題でかなり時間を取ったが、「自主的」の問題も同じような感じだ。「自主的」は資料3の第2パラグラフにある。ここの整合性はいかがだろうか。資料の記述の問題、「自主的な学び」ということをうまく説明しているかという問題だ。ここで言う「自主的な学びのスタイルを構築し、知識を深めるために」と、やはり、ここで「知識」ということ。「個性や能力を伸ばす」、ここで「技能」のような感じも読み取れないこともないかなと思う。

(毛利副会長)

逆に言えば「知識を深めるために」という一言を消すだけで、すんなり読めるかもしれない。「生涯を通じて学び続ける」に「知識を深めるために」という目的をここに書いてしまうから。

(田中会長)

1つだけクローズアップされてしまう。無い方が良いわけだ。

(毛利副会長)

無い方が、学ぶということに対してダイレクトに行けるのではないかと思うのだが。

(田中会長)

そうすると、原案の文章の方で生涯学習の中身を詳しく過不足なく説明していただければOKということになるかと思う。そういう問題解決の方向でよろしいか。

(絹野委員)

人間像では「自主的に学び」ということを言っているのですが、考え方には「自主的な」という言葉を使わずに、「主体的・対話的な」という言葉を活用するという方法もある。そして、「構築し、生涯を通じて学び続け、問題解決能力を高めるとともに、個性や能力を伸ばす」という意味を込めたようなことがあると、かなり煮詰まってくるという感じがあるのだが。

(田中会長)

具体的なお提案をいただいた。「自主的」を、例えば「主体的で対話的な」という。

(絹野委員)

まさしく学び方を言っているわけですから。学びのスタイル。国ではアクティブ・ラーニングは使わないと、はっきり宣言したわけだから、市も是非そういう言葉を使わずに、学び方の姿勢をきちっと示していくということがあってもいいと思う。

(田中会長)

それでかなり豊かになると思う。資料3にそういった言葉を入れることと、確認だが、資料2の「自主的」という言葉を「主体的で対話的」に変えていくと。

(毛利副会長)

修正したものを一度見たい。

(田中会長)

協議事項の1点目については、次回、事務局から再修正案を提案いただくこととする。



さて、残り45分だが、協議事項の2点目が残っており、「人間像を実現するための方向性」という問題について、今後は、資料4に基づき議論をしないといけないということになる。これについて、事務局から説明をお願いしたいと思う。

《事務局より、資料4に基づき説明》

(田中会長)

それでは、後半の私どもの任務だが、資料4の大きな表を見ていただきたい。この中に太枠に囲まれている大きな6つのカラムがある。左側の縦列が「資質・能力」の視点ということで、どちらかというところ、この縦列は育てていくべき目標項目や、いわゆる内因的なことだと思う。それから「環境」の視点という縦の項目はどちらかというところ外因的であって、目標を達成するための条件、こういったものが記載されているのだと思う。既に、黒丸の1ないし2、場合によっては3つぐらい項目が入っている。ここにさらに追加すべきキーワードが何かあるかどうかということだ。このキーワードをぜひ探していただきたい。

8分ぐらい皆さんにお考えいただきたいと思う。19時30分ぐらいになったら皆さんからご意見をいただきたいと思うので、少々お考えいただきたい。

《検討時間8分》

(田中会長)

よろしいか。途中で他の方の意見を聞かれて発想されるものもあるかもしれない。残り30分だが、我々が埋めるべきところは6つあるので、基本的に5分ぐらいずつで行きたいと思う。

それではまず、縦列、左の一番上、「生きる力」と書いてあるところ、ここのカラムで何か発想されたご意見があるか。どなたでも結構だが、いかがだろうか。

私が気づいた点が1つあり、経済協力開発機構(OECD)が言っているキー・コンピテンシーに「学び方の学び」というのがある。学びのツール、それから、問題を解決する様々な新しい学びの方法を学ぶ、というのが重要だと言っている。なぜ重要かというところ、自分の学びを設計できるからであると。次々に新しい学びの方法が生まれていて、eラーニングとか、授業を受けなくても自分の家でアメリカの大学の講義を受けられる、お金は払わなければいけないが。世界中どこにいてもSkypeとかで先生と直接話もできる、そういう時代になっているので、「新しい学びの方法を習得できる、活用できる力、学び方を獲得できる力」というか。少し変な言い方だが、「学びの学び」、そういうのがキーワード

になるのかなと思う。その他、いかがだろうか。

(毛利副会長)

継続する力は必然で必要だと思うが、「学び続ける」という言葉がすでに出ているので、たいして違いがないかなと。続けなければ得られない、続けて初めて得られるので。

(田中会長)

大学で学んでそれっきりというのは結構多い。そうではないと。大学出てからも学び方があるという。社会に出てからも自分で継続的に学べる方法があると。そういう学びのチャンスをも自分で発掘し、うまいことやっている人がいれば、その人がやっている方法をスパッと真似て自分のものにしてしまう、こういう「吸収力」だ。資格を取るとか。そういう学び方の学び、学びの価値の発見の仕方とか、OECDで「多様な学習ツールの獲得」というのがある。言語を含めた学びのツール、外国語を獲得するというのもここにつながってくる。日本語でしか見られないサイトよりも、英語圏で見た方が、例えばWikipediaは、英語の方がはるかに豊かな情報が出ていると思う。だから、「言語の獲得」もそこに入ると思う。いかがだろうか、その他に。

(齊藤委員)

田中会長がおっしゃったことも含まれていると思うが、「設計する」というか、「自己マネジメント」。つまり、「自主的に生涯学び続ける」ということ。ある1つの目的だったり、自己実現だったり、ライフプランだったり。そこに自分で考えながら進んでいく生き方、学び方というのがあるような気がしている。何となく頭に浮かんだ言葉は「設計」だ。

(田中会長)

「人生の設計」。職業的なキャリア設計。キャリア教育というのはそういうことになっている。

(齊藤委員)

自分というのはオンリーワンだ。「自分で生きていく上でどうなりたいかというのを自分で考えながら学んだり、判断したりする」というイメージだが、「設計」という言葉は適切じゃないかもしれない。

(毛利副会長)

「デザインする」とか。

(田中会長)

「生き方のデザイン」。それは、たぶん「学び方の学び」の上位に当たる言葉だ。それがあるから学び方をしつこく追求する。

では、次、その下の「共生」のところ。ここはいろいろあるかと思うが、いかがだろうか。「共生」の感覚に結びつく重要なキーワードだと思う。「多様性を尊重し」というのは難しい言葉だ。

これもOECDの言葉だが、異質な集団あるいは個人と自らつながりを求めていく、交流していくということが求められている。函館弁で言うと“ものずき”，変わったものにくっついていく、それと交わろうとするという感覚だ。「自分と違うものを拒絶しない」という問題と、「もっと積極的に、自分と違っているものに何か魅力を感じ、そこから何かを吸収しようとして自ら乗り込んでいこう」という、その感覚だ。「異質な集団あるいは個人と交流しようとする態度」なのかなと。

(毛利副会長)

私はこの「資質・能力」では「違いを感じる心」，同質じゃなくて異質とおっしゃったように、「異質を感じる心」が必要ではないかと。「違うということをまず認める」。それがまず必要だと思う。そして、接するのだが、接することでまた理解が生まれる。

(田中会長)

いじめの問題も深く関わってくる。スクールカーストというものとか。

(毛利副会長)

そういうことが「多様性を尊重する」ということに全部含まれてしまうと、わざとあまり細かいことを出させないように仕組まれているような気がするが。それであれば、外した方が良くもしいない。

(田中会長)

井上委員，いかがだろうか。多様性の尊重について。

(井上委員)

多様性を尊重するという気持ちは誰しも少しあると思うが、「自ら進んで協働しようとする」というのは、また一歩進んでいる。自分から進んで相手に話しかけたり、ただ受動

的ではなく能動的に、そういうのが強く含まれていると感じる。日本人はそういう部分が弱い。外国の方と接すると、外国の方はすごい来る。「これはどうなの？ああなの？」という感じで。でも日本人は「英語しゃべれないから」という感じでちょっと。そういう部分もあるので、自ら進んでというのを大切にすると良いのかなと思う。

(毛利副会長)

これは1つの文になっているが、カンマの部分で切って二分しても良いぐらいだと思う。分けられるのではないだろうか。また、レベルが、ステージが違うのではないだろうか。

(田中会長)

多様性を許容するという問題と、「自ら進んで」はちょっと水準が違うということの意見だった。発展的ということだ。その他、何かないだろうか。

それでは、最後の「創造」、これが一番難しいと思うが、いかがだろうか。

(井上委員)

「郷土愛」という語句に引っかかりまして、参考資料3の8ページ(5)に「本市の魅力は、長い年月をかけて先人たちが培ってきたものであり」という部分がある。函館の歴史や文化については小学校でも深く勉強するし、実際にその場に行って知ることもできる。函館から出た私の友人たちも、「郷土愛」を持っていて函館が大好きだし、函館に帰るのが楽しみだと言う。だが、帰ってきて真っ先に行くのが蔦屋書店などの今流行りの場所だ。「郷土愛」を持っているけれど、人が戻ってきてくれるというのは、また違う部分なのか。函館には食があったり文化があったり、そういった魅力があるのはみんな分かっているけど、実際に戻ってくるためには、それとは別の部分で魅力を感じるからなのではないかというのは感じていた。

資料2に戻っても、「「函館市の将来像」の「今を生きる私たちの使命は、現状に甘んじることなく」というのが強く目に入った。蔦屋書店ができた時には、こんなすごいお店が函館にできても、すぐに潰れてしまわないかと思ったが、今では文化の発信地にもなっており、いろいろなワークショップが行われて学びの場にもなっていて、すごく分かりやすい成功例なんじゃないかと感じている。

(田中会長)

「郷土愛」をもうちょっと噛み砕いてということだと思う。「郷土愛」という言葉は水準が高い。「郷土愛」につながるような、基本的なものがあるはずだ。「郷土愛が生まれ

てくるプロセス」、それが大事かもしれない。何故、「郷土愛」が生まれてくるのか。

それから「感性」という言葉、「創造の基礎となる感性を育む」。創造というのは感性なのだろうか。中島委員、いかがだろうか。

(中島委員)

「資質・能力」の視点ということで2つ書かれているが、私は函館に来たばかりでまだ1年たっていないが、函館は非常に魅力が溢れているということを感じている。

私は市内のいろいろな所を土曜日、日曜日に回り、観光地も、市内にたくさんある公共温泉は昨年から20か所近く回ってきた。まちの中の色々な所にそういった施設や歴史的に貴重な文化財がたくさんあって、カメラを持って自転車で写真を撮って回っているが、本当に素晴らしい魅力あるまちなのだと感じている。ただ、それを長年住んでいらっしゃる住民の方が、果たしてどの程度知っているのかなと思う。

知人が函館に遊びに来た時に、観光地など色々なところを見せたところ、「こんなに素晴らしいところがあるんだ」と驚いていたので、そういった地域の色んな良い所を再認識・再発見していくことが、「郷土愛」に繋がってくるのかなと感じている。

小さい頃から色々ところで歴史について学習したり、地域の自由研究ということで回って、それらを今度は逆に、函館に来た人に子どもたちが説明できたりすると、もっと郷土に対する愛着だとか誇りというものが、小さい頃から積み重なってくるんじゃないかなと感じている。

(田中会長)

今のお話を聞いて思い出したが、私のところに「函館の景観をどうやったら美しくできるか」というアンケートが来た。改めて考えてみると難しい。魅力はある、けれども、我々自身、「函館の魅力は？」と聞かれて、少し言葉に詰まる。函館山とか出てくるが、「どこが良いですか？」と聞かれても、いろいろ様々で、もう発見できない。そういう意味で言うと、魅力を発見できるかどうかというのが基本的な能力だ。だから「感性」というのは、そこかなと今のお話を聞いて思った。

だから、我々が持っているコミュニティと、まちの歴史やそういった魅力に「気づく力」。小さな子どもにもあると思う。そういう「魅力を発見する能力」というのが非常に重要で、「どうやったら、まちがきれいになりますか？」と聞かれた時に、「ここはダメですよ、あれはダメですよ」と、問題が分かるということだ。そうすると、「問題を発見する力」も重要だ。そして、その問題を発見し、問題を解決しようと思った時に、1人ではできない。景観の問題は1人ではできない。協力者も必要だし、いろんな方と手を組んで問題解決されている方々がいる。歴風会、函館の歴史的風土を守る会などはすごい

と思う。お年寄りも結構多いが、自腹を切って活動をしている。そういう「共に知恵を集めて他の人と協力・協働して問題を解決しようとする態度や行動」、ここからしか「創造」はできないのではないだろうか。そんな気がするが。

(毛利副会長)

態度や行動は、おそらく「環境」の視点の話をしていると出てくると思う。そして、もしかしたら、「資質・能力」の視点が一層明確になると思うが、とりあえずは他の部分を追いかけた方が良いような気がする。

(田中会長)

それでは、右下「創造」の「環境」の視点にはどのように結びつけていくか。

(毛利副会長)

中島委員がおっしゃったように、例えば、ホストファミリーをやっている方は、必然的に函館の紹介をするわけで、姉妹都市など、交流している子ども同士でも大人同士でも、「知ることよりも説明すること」の方が、こういう感覚が身についていくだろうと思う。「説明できるような場」があれば良いと思う。それが何になるのか。人によっては景観のこと、歴史のこと、それから文化のこと、先ほど井上委員から出てきた、文化をめぐって来て今ここまで来ている、ということも含めて、「自分で説明する場」が欲しいと思う。

(田中会長)

「説明」ということは「伝える」ということだ。他者に、このまちの魅力や、問題も含めて、そういったものを伝える、広める、そういう場が必要だということだ。

(毛利副会長)

そうだ。「環境」としては。用意できるものとしては。

(田中会長)

私は芸術的なことを考えていて、「アイデアや作品を発表できる場」が十分にあるのだろうか、あるいは、まちづくり政策などは学生が大学でも発表しているが、あまりお客さんがいらっしやらないので、とても寂しいと思っている。それがまちの大きなイベントの中でやられると、色んな方にご紹介することができる。大学も研究発表会などを行っている。そういう「相互的な市民のアイデアや作品、そういった発案を発表・交流できる

場」があると良いと思う。竹内委員，いかがだろうか。

(竹内委員)

会長がおっしゃられたことについて，私は「発信する力」というのが必要だと思う。私は「郷土愛」というのは非常に大事だと思っていて，地域の雇用の場や施設などいろいろと大事だが，一度外に出て活躍されている方が戻ってくる大きな1つの要因は，「子どもの頃に培った郷土愛」。それだけではないが，大きな役割を果たしていると思う。そのためにも「地域のことを学んで」。毛利副会長がおっしゃったホストファミリーもそうだが，「発信する場」があれば，なお，そういったものが深まると思っていて，「発信する力」というのは，函館の教育の中ですごく大事で，子どもたちの力になると思う。

(田中会長)

「伝える」ということだ。それが「環境」の中に入る。

(竹内委員)

「環境」というか，「発信できる力」。

(田中会長)

「発信できる力」と「発信する場」。発信する能力も大事ですし，発信する場も環境として必要になる。

同じ感覚でやっていくと「共生」も「自立」もいけるんじゃないかという気がするが，残りが5分くらいしかない。「共生」のところで，「互いに学び合える場」のような。先ほど「対話的学び」というのがあった。それにつながるものなのかもしれないが，「一方通行ではなく，相互に学び合えるような場やコミュニティを作る。」ということがある。これが「共生」の中に教育課題として，「共に学び合える」というのがあるかもしれない。そのほか，「自立」も結構だ。「自立」の「環境」，中村委員，いかがだろうか。

(中村委員)

「自立」も「共生」も「創造」も，すべての「環境」の視点に必要だと思うのが，「地域の力」。例えば，「自立」でいうと「生き方をデザインする」というところでも，自分の周りに「自分の人生がこうなったら良いな」と思えるようなモデルがあれば，自分でデザインできるのではないか。親や周りにいる地域の大人だったり，学校の先生たちもそうだが，我々大人も，子どもや自分よりも目上の人と出会って会話する中で，色々感じるところもあるので，すべてにおいて「地域全体で支える仕組み」があれば良いなと思うし，

地域の大人力であったり、地域に暮らしている身近な人たちとうまくお互いが成長していくことができれば良い環境になるのではないか。

(田中会長)

すると、「自立」と「共生」に同じような項目が入るということか。

(中村委員)

すべてにおいてだ。「創造」に関して、函館を知るということは、身近な大人から聞くのもそうだし、函館を外から見た人から聞くのも大事なので、函館について交流できるような場があれば。とにかく、すべてにおいて「地域の力」というのをどこかに取り入れていければ。そして、言葉としても出してもらえると、地域の中で「自分は何もできないかもしれない」と思っている人にとっても、自分を表現することができるのかなと思う。

(田中会長)

「地域の力」はすべてに共通するというご意見だった。齊藤委員、いかがだろうか。

(齊藤委員)

また「創造」の部分に戻るが、「新たな価値を作る」というのは「ブランディング」だと思う。「ブランド化」する。例えば、資源豊かな函館には、温泉だったり、食資源だったり、歴史だったり、素材・資源がたくさんある。この資源の価値に気づき、「新たな価値を作る」というのは、ここで単なる交流とか発信じゃなくて、「そこに価値を作る」という、ひとつ深い創造的というか、創造的な1つの工程が入っていくと思う。それで、産業としては、例えば6次産業化とか、そういうところも入っていくと考えていく。

その時の根本になっているものが、「自立」だったり、「共生」だったりするので、先ほどの構想図の話にも戻るが、「創造」というものはそれらがあってさらに創っていく価値。「新たな価値でつながっていく」という。新しいというのは、やはり価値は今まである価値あるもの。歴史があったり、郷土愛だったりするが、「新しい価値」というものを、ここで価値付けて、資源の中から「これが価値だ」というふうに外から見目だったり、そこにいる人が気づきだったり、時代とともにであったりしながら、そこにブランディングしていくというような考え。個々のデザインとともに地域の姿かなと思う。

(田中会長)

「地域の魅力と発見」と「創造する」ということ。これが2つくっついて「ブランディング」というものに繋がっていく。「地域の魅力を自ら認識する」ということだ。「気づ



き」の問題。それはたぶん、「創造」のところに入るだろう。「創造」の「ブランディングする能力」と、環境では「色々な試行錯誤を含めた議論する場」が必要ということだ。ビジネスの世界の中ではごく普通のことだ。その他、全体を通して何かあるか。

(毛利副会長)

中村委員のおっしゃったことだが、結局、函館のまちのどこか1か所に立派なものを作るのではなくて、地域の中で行きやすい場、ちょっと足を運べばその場に行けるというような小さなコミュニティがたくさん必要だと思う。電車に乗って遠くに行かないところに行けないのではやはりダメだと思うので、そうなる「地域の力」に頼らざるを得ない。

(田中会長)

「地域力を引き出す力」。

(毛利副会長)

それができないと、教育はこの先進んでいけないと私は思う。

(田中会長)

学校がコミュニティに支えられるということか。

(毛利副会長)

支えられる、というよりは、支え合うと言うのかな。だが、学校という単位はあまり出さない方が良さそうな気がする。単位化しないで色んなエリアを想定した方が。

(田中会長)

「地域力という問題を深く捉える」必要があるということだ。

少し時間を過ぎているので、基本的な方向性のキーワードを取りまとめるというところまでは今日は難しいと思う。

(絹野委員)

1ついいですか。この「視点」という時の表現の仕方だが、「～する」あるいは「育む」のように用言止めで止めているが、「視点」だから、例えば「安全・安心な学びや活動の場を整備」のように、体言止めで止めた方が良いのではないか。

それと、やはり資料2と資料3の整合性。もう少し具体的に分かるような観点にならな

いだろうかと感じている。よく分からない。資料2の考え方、それと資料3の文章化されているもの。これらのものと、この「視点」。表現の方法が用言止めで良いのかどうか。その辺、少しわからないので聞いた。いかがだろうか。検討していただければ。

(田中会長)

たぶん、資料3は先行的に案として作ったもので、おそらく、この資料4が完璧にでき上がっていくと、また大きく変わっていくものだと思うので、基本は資料2の考え方、これがすごく重要だ。これを絞っていただいて、シンプルに整理していただいた上で、この資料4とともに、よく整合するように検討していただく。その上で、資料3の文章について、もう一度書き起こしていただくということになるかと思う。

(絹野委員)

「函館で活躍する」という文言は「函館で生きる」という考え方をしていたので、あまり気にならなかった。先ほども話したが。

(田中会長)

それでは定刻を5分ほど過ぎたので、本日はここで議事を終結させていただきたいと思う。一旦、事務局にお戻ししたい。

## (2) その他

(事務局)

次回の協議会の開催については、新年度の4月を予定している。次第については、本日の基本的方向性の部分、本来は、第1章から第3章、第5章の部分をお示しする叩き台としての協議をお願いしたいと考えていたが、後日、会長、副会長とご相談させていただきながら、近く、委員の皆様にお知らせしながら諮ってまいりたい。

(田中会長)

それでは、今日の議事はこれで終了としたい。

## 3 閉会